

かささぎ

通信 第106号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2021年 9月 10日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

二〇二一年七月の「森三郎の作品を読む会」では先月に続いて『赤い鳥』のコラム「昔の笑話」を読みました。

先回の「かささぎ通信」第105号で「ほうろく」売りの話を紹介しました。「昔の笑話」の中には他にも物売りの話が出てきます。二つ紹介します。(笑話の引用文は現代仮名遣いに変更)

▽「わすれ草や、わすれ草や。」と表をよんで通りました。ある男が「おい、わすれ草を見せてくれ。」とよびとめて「わすれ草とは、めずらしい名前だが、見ると大した花じゃないね。」「いいえ、いいえ、この花は薬になります。年中これを見ていると、世の中の苦勞をわすれ、夏は暑さ、冬は寒さをわすれます。」「そりゃ面白い。ねだんはいくらだい。」「はてな、それをわすれてしまいました。」「(一九三三年十一月号 p.41)

「物忘れ」というと前回も「茗荷」の話をしました。宿の亭主夫婦が茗荷づくしで客を接待したところ、客が宿代を払うのを忘れて行ったという話と同類のオチです。

▽まのぬけた顔をした魚屋が、水漬(みずばな)をたらしながら盤台をかついで「さあ、ばか貝。大ばかのとれたてだア。」とどなりくうりに来ました。「見ろよ、ばか貝。どなただとなってるが、あいつの顔こそ、馬鹿の看板だ。」「どうだい、一つばかを買って食おうか。おしい、ばか屋、大ばかやろう、ばかを買ってやろう。」「とどなりますと、ばかうり「はいく、ばかはこちらさんですか。」「うん、おれだ。」「(一九三四年一月号 p.36)

この話について、森三郎は後年「鈴木三重吉研究(九)バカの焼き方」(『新文明』一九五九年八月号 p.88)で取り上げています。次に引用するのは、鈴木三重吉の自宅兼編集所であった「赤い鳥」社の雰囲気分かるエピソードです。

先生は、このわた、うにの類は嫌ひであつたが、大した食通で、自分のところの凝つた料理のかづかづを、奥さんの名前で雑誌「女性」に発表されたこともあつた。(中略)

「『バカだ、バカだ、大バカのとれたてだ』と売りまくる。『おおいバカ、大バカ野郎、バカを買ってやろう』『はいはい、バカはこちらさんで?』『うん俺だ。』」

さうした江戸の笑話を私が「赤い鳥」の埋草に書いたとき、先生が喜ばれて、晩の料理の一皿をバカにすべく奥さんにととのへさせられた。「森くんは笑話を書くことの名人でねえ」と、その笑話の作者が私でもあるかのやうに機嫌がよかつたが、バカの皿と七輪とを運んでこられたすずきさんに、バカの焼き方が分からなかつた。「バカの焼き方くらゐ知つとけえ、バカ」で、笑話がもう一つ出来てしまつた。

元号に関する面白い笑話もありました。

▽「おいい年号がかつたが、知ってるかい。」「うん知らない。何とかかわつた?」「寛政さ。」「寛政?ひどく言いにくい名だな。十助とか八助とかつければいいに。」「じようだんじやない。そんな年号がどこにあるもんか。」「だって昔は、ぶんぢだのげんろくだのというのがあつたよ。」「(一九三四年四月号 p.89)

文治(1185年~1190年)、元禄(1688~1704年)も、耳で聞くだけですと、人の名前に聞こえるのだと分かります。「寛政」(1789年~1801年)と言えば、刈谷には「寛政一揆と狐」という昔話があるという参加者の話がありました。寛政二年十一月に起きた寛政一揆に際して、刈谷の狐たちの代表が、百姓の味方をしようかどうかと話し合ううちに、夜が明けてしまつたという話です。(『昔話 天狗火』(加藤則之編著、1976年)所収)。

次回「森三郎の作品を読む会」

二〇二一年十月八日(金)午後一時半~三時半 実施予定

少国民文芸選『かささぎ物語』(帝国協会出版部) 続き